常陸大宮市史編さんだより　Vol.63

古い日記　―「日常」を考える素材姿

「10年ひとむかし」という言葉があります。私たちが生きている「いま」も10年もすればもう昔のことに感じてしまう。それくらい、世の中は激しく移り変わっていくことの例えです。

①昭和13年（1938）12月5日　「麦ふみをする。大宮駅へ出征兵見送りに行く。」

②昭和23年（1948）11月28日　「炭焼をする。･･･籾ほしを終る。五俵を俵にする。炭焼き3.0ｈモミノ調製2.5ｈ」

③昭和33年（1958）11月25日　「金南瓜を上げる。煙草本葉の調理をする」。

現在、明治44年（1911）生まれの人が残した日記を整理しています。上の①～③は、そこから一年のうちのほぼ同じ時季の記録を抜粋し、10年間隔で並べてみたものです。どれも短い文章ながら、当時の生活の破片を見つけることができ、暮らしの変遷を辿る手がかりになります。

例えば、③の葉煙草の記録は、常陸大宮市域の農家生活を語るに欠かせないものです。①には、農作業とともに、戦時下を象徴する出来事が記されています。自分の意思とは関係なく「日常」が違う形になっていく、私たちの今と重ねながら読める記述です。終戦間もない時期の記録である②には、仕事の内容だけでなく労働時間が記されています。その日の仕事量を時間で測る（表す）ことは、一体いつ頃に日常的な感覚になったのでしょう。関心は尽きません。さらには、南瓜が③の60年後に「お化けカボチャコンテスト」で光を浴びることになるのを同時代の人は想像していなかったかもしれません。

林　圭史氏
茨城県立歴史館　史料学芸部学芸課　主任学芸員

今回紹介した日記は、個人の備忘録・内省的な記録で、他人に見せることを意識した現代人のＳＮＳとは性格が異なります。しかし、ＳＮＳも50年後には歴史資料として扱われているかもしれません。葉煙草の栽培で忙しく過ごしたあの頃、あるいは東日本大震災、そしてコロナ禍の経験。体感や記憶の中の時間の長さや濃さは、同じ国や市町村に暮らしていながらも、家庭や個人によって違うでしょうし、情報技術の進化は、生活環境の様変わりをさらに早めているようにも感じます。そんな「いま」を生きている皆さんが感じる「ひとむかし」は何年くらい前ですか？

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）